（様式１）

令和5年度　学力向上指導改善プラン

三田市立富士小学校長　岡田　和士

学校教育目標	わかる喜び、できる自信を実感し、人とのつながりを大切にする児童の育成
推進主体	教育課程検討委員会　（管理職・主幹教諭・教務主任・研究主任・生徒指導担当・新学習システム推進教員）

			学力に関する前年度の状況・経年の課題等	学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標（指標となる数値等）	具体的な行動目標（成果目標達成のための具体的な手立て等）	年度末評価（今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
				4月			2～3月	
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語	○総合的にみて良好な結果である。「話すこと、聞くこと」については、正答率が全国平均を5ポイント上回る結果であった。 ●根拠を明確に示しながら、論理的に自分の考えを話すことができるよう指導を継続することが必要である。 ●話し相手の意図を捉えながら聞き、自分の考えと比べて考えをまとめることについて、実際に話す・聞く場での指導の継続が必要である。 ●文中の主語、述語の関係を正しくとらえて文を書く力を育てていく必要がある。 ●文章の内容を要約して書くことについて課題が見られる。 ●漢字の習熟について、課題がある児童が見られる。	○根拠をもとに論理的に考え話す力、相手の意図を捉えたり自分の考えと比べたりしながら聞く力を育成する。 ○文章の内容について、要点を明確化し、文章の構成を考えながら書く力を育成する。 ○漢字の読み、書きを中心とした基礎基本のさらなる定着。	○「人物像や物語の全体像を具体的に想像する」ことを求める設問で、正答率が全国平均を上回る。 ○「話すこと、聞くこと」「読むこと」についての設問では、正答率が全国平均を5～7ポイント上回る。	○国語の授業において、ワークシートを活用して予め自分の考えを書いておけるようにする等して、考えを発表しやすいようにする。 ○話す聞くは、すべての学習の基本であり、相手や場面に応じた話し方、要点や大事な言葉を聞き漏らさない聞き方について、学習場面のみならず、生活場面でも丁寧な指導を継続する。また授業の中でペアトークやグループトークを意識して仕組み、お互いの意見を交流しやすいようにする。 ○人物像等について「どのように描かれているか」に着目して読むことができるよう、様子を表す言葉について着目して読むよう指導する。 ○朝学習の「チャレンジタイム」において学習のカリキュラムに沿った漢字練習を行い、漢字の習熟を図る。	◇ワークシートを活用することは、子どもが自分の考えを表出するのに効果があった。 ◇子どもアンケートでは、「自分の考えを発表するのが好きですか」という項目に対し、全体でA・B評価は89%であった。ペアトークやグループトークを意識して取り入れ、お互いの意見を交流してきた成果だと思われる。根拠を明確にして意見を述べることについては子どもが意欲的に考えたくなるような発問についても研究を進めていきたい。 ◇人物像等について「どのように描かれているか」に着目して読み深める取組をする ことで、想像力や相手の気持ちを考える力が身に付いてきた。 ◇朝学習「チャレンジタイム」での漢字練習の積み重ねにより、漢字の読み書きについての基礎基本の定着が見られた。	A
		算数数学	○整数や小数の四則計算等、基本的な計算技能は概ね習得できており、知識・活用ともに概ね満足できる結果であった。 ○「測定」領域、「変化と関係」領域における各設問においては、概ね満足できる結果であった。 ●「データの活用」領域における設問では、施行・判断・記述に課題が見られた。 ●「式と計算」領域において、場面から数量の関係を捉えて式に表す設問では、除法の式の意味を理解していることについて課題が見られた。	○計算力を中心とした基礎・基本のさらなる向上を図る。 ○子どもが主体的に学習に取り組み、根拠をもとに考えたり、発表したりする学習を通して、課題解決の達成感と学ぶ楽しさを感じられるよう授業改善を図る。	○「示された場面において、目的にあった数の処理の仕方を考察できる」領域で正答率で全国平均を上回る。 ○質問紙調査の「算数の勉強が好きですか」「算数の勉強がよく分かる」についての肯定評価で、前年度より＋3ポイント以上。	○低学年から学習のルール作りを徹底する。 ○朝学習の「チャレンジタイム」において学習のカリキュラムに沿った四則計算を中心に練習を行い、基礎基本のさらなる定着を図る。 ○算数の授業において、課題解決型の授業構成を取り入れる。めあてに沿って自力解決を行い、それをもとにペア、グループ、全体で話し合い、考えを深め、振り返りを行う授業を進める。 ○高学年の算数は専科制とし、一人ひとりの児童の課題を確認しながら基礎学力の定着を図る。 ○ICT機器およびデジタル教科書を活用し、学力の向上を図る。	◇学習のルール作りを丁寧に行ったことで、落ち着いた環境の中で学習を進めることができた。「チャレンジタイム」で四則計算の練習を積み重ねたり、児童の課題を確認しながら指導に当たったりしたことで、徐々に基礎学力を定着させていくことができた。 ◇ペアやグループの対話の時間を取り入れたことで、子どもがより主体的に考えたり発表したりする姿が見られ、学びを深めることができた。 ◇高学年の算数を専科制にしたことで、指導の専門性が高まり、子ども一人ひとりの学力状況を把握して授業を進めることができた。学級担任と連携を取り、指導の充実を図っていくことが今後の課題である。 ◇全学年、ドリルパークを活用して、四則計算を習熟させることができた。今後もICT機器の効果的な活用について研修し、学力の向上につなげたい。	A
		ICT機器を効果的に活用した取組状況	○タブレットを使って調べ学習をしたり、ドリルパークを使って漢字や計算の復習学習を行った。 ○キーノートを使ってまとめ、総合などの発表活動に活用した。 ○音楽の学習では、作曲学習をタブレットを使って行った。また歌唱の宿題を出し、自分で歌っているところを撮った。 ○週に1回、ドリルパークの宿題を出し、タブレットを持ち帰った。	○タブレットの正しい使い方やさまざまな機能を知り、実際に操作しながらICT機器に慣れ、効果的な活用を図る。 ○各教科でICT機器を効果的に使い、児童の理解促進を図る。 ○学級閉鎖等になったときも、タブレットを通じて家庭での学習を行えるようにする。	○学力テストの質問紙調査「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。」の肯定評価で前年度より+3ポイント以上。 ○保護者への学校評価アンケートの中に、ICT機器に関するアンケート項目を取り入れ、肯定的な評価が得られるようにする。	○3年生以上は、算数の宿題をタブレットで出し、効果的に家庭学習を行う。 ○学年ごとに発達課題に応じた情報教育のプログラムを作成し、指導にあたる。	◇3年生以上は毎日タブレットを持ち帰り、算数の効果的な家庭学習を行うことができた。 １、2年生は2学期後半から毎週水曜日にタブレットを持ち帰り、計算学習を行うことができた。全体的にタブレットの操作に慣れ、学校でのその他の活動への取り組みでもスムーズに行うことができた。 ◆保護者アンケートにおいて、「情報機器の使い過ぎによる視力低下の懸念」や「記述力や思考力の低下の懸念」の声があがっていた。来年度は、情報教育のプログラムを綿密に作成し校内で足並みをそろえて取り組んでいきたい。そのために職員研修も行っていきたい。	B
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		○単元ごとの漢字テストや学期末のテストにおいては、概ね満足できる状況であった。	○対話を意識した授業づくりを継続するとともに、学級経営を見直し、安心して発言できる環境を整えていくことや、聞き方・話し方を意識させたより良い学習の場を作っていく。	○積極的に本を読む習慣を身につける。 ○学校独自アンケートにおける「積極的に読書をしている」についての肯定評価を前年度より＋3ポイント以上。（「積極的に本を読んでいる」については、学校独自子どもアンケート　R4年度AB評価75%、保護者アンケート57%）	○学校司書と連携し、各教科学習と読書活動を結びつけていく。 ○朝学習の「チャレンジタイム」において読書時間を設け、読書の充実を図る。 ○図書の時間でビブリオバトルやブックトークなど、本に興味を持てる活動を取り入れる。	◇学校司書の支援による図書推薦や読み聞かせ、読書通帳の活用により、子どもたちの読書活動を充実させることができた。 ◆保護者アンケートで「子どもは,積極的に本を読んでいる」の項目に対しA評価が２５%であった。今年度は朝学習の時間に読書タイムを設定し、読書の時間を全校で設定したがこのような結果になったため、本をすぐに手に取れる場所に置くなどの工夫・環境整備を進めていく。 ◆高学年でも学校司書によるビブリオバトルやブックトークを行い、本に興味が持てるように取り組む。	B
	授業等からうかがえる状況（各教科）		●対話を通して協力しながら学習することに取り組んでいるが、全体の場で自分の考えを発表することに苦手意識を持っている児童が少なからずいる。					
学力向上に係る学習習慣等の状況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		○学習意欲・学習習慣・生活習慣・規範意識についてはおおむね良好と判断できる。 ●一日の読書時間の短い児童が多い。ゲームやインターネットに時間をかけている。 ●家族や地域の人と話したり関わったりする時間・機会が少ない。	○家庭における自主的な学習習慣の確立をすすめる。	○学校独自の保護者アンケートの家庭学習の項目「子どもは進んで学習しようとしている」についての肯定評価を前年度より＋3ポイント。（学校独自保護者アンケート　R4年度７３%）	○家庭学習が習慣化しやすいように、「音読・計算・漢字練習」といったようなパターン化した宿題を出し、評価して次への意欲につなげる。 ○家庭学習や生活習慣について、学級懇談会や学級通信、学年通信等を活用し、保護者と連携する。 ○週に１回、タブレットの宿題を出し、学習意欲の促進と学力の定着を図る。	◇保護者アンケートで「子どもは進んで学習しようとしている」の項目に対し、A・B評価は76%で、昨年度とほぼ同じであった。今後も家庭学習が習慣化しやすいようにパターン化した宿題を出し、評価して次への意欲につなげる。また、学習の成果や課題を細かく見取り、学級懇談会や通信等を活用して連絡し、子どもの学習意欲向上に向けて保護者と連携していく。 ◇今年度は算数の宿題をタブレットで行った。宿題として定着し、学習意欲の促進と学力の定着を図ることができた。	A
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		●学校独自に年2回「子ども生活実態調査」を実施し。結果からは、「あいさつができている」児童の割合が高いが、児童の様子を見ると満足できるとは言い難い実態も見られる。児童と、教師保護者の間で、「あいさつができている」ことについての認識に差があると考えられる。	○自分から進んであいさつできる児童を増やせるよう指導を続ける。	○学校独自の保護者アンケート項目「進んで挨拶する態度が育っている」についての肯定評価（A評価）を前年度より＋3ポイント。（学校独自子どもアンケートR4年度57.8%、学校独自保護者アンケートR4年度25%）	○教師から率先して挨拶をする。 ○月目標にしてあいさつを子どもたちに意識づける。 ○挨拶は「いつでも、どこでも、誰とでも、自分から」を合言葉に意識づけをする。 ○学級懇談会等の機会を活かし、保護者にも啓発する。 ○児童会で計画する「ニコニコデー」の挨拶運動を啓発の機会とし、中学校区全体でも挨拶を広げられるようにする。	◆保護者アンケートで「進んで挨拶する態度が育っている」の項目についてA評価は18.4%で前年度より9.8%下回った。一方、子どもアンケートで「挨拶をしていますか」の設問に対しては、A評価は59.6%となっており、昨年度を約13ポイント上回った。今後も気持ちの良い挨拶の輪を広げていけるよう指導を継続してく。「にこにこデー」等の児童会活動の内容については、今後さらに充実できるよう、代表委員会等で子どもたちと考えていく。	B
校内研究・研修の状況	校内研究の状況		○引き続き、人権教育を柱にした校内研修を推し進め、特別支援の必要な児童についての共通理解を深め、効果的な支援の方法や支援のポイントをさらに学び、深めていきたい。 ●研修時間を確保するために引き続き、校内の会議等を精選し、教職員間で話し合える時間の捻出を図りたい。	○校内研究において、「気づき合い、認め合い、つながり合おうとする子どもをめざして ～対話を通して自分と向き合い考えを深める授業づくり～」を研究主題として、学級作りや授業作りを進める。	○学校評価において、教職員アンケート結果の肯定評価を前年度よりも高める。	○講師を招聘し、研究主題にせまる学級づくり・授業づくりのあり方について研究を進める。 ○特別活動における話し合い活動の積み上げを、今年度も続ける。 ○ICT機器及びデジタル教科書の有効な活用について研修を深める。	◇各学年において研究授業を行ったことで、教職員一丸となって教材研究を深められた。対話を通して考えを深めるための授業の進め方や発問の在り方について、活発に議論することができた。 ◇人権教育推進担当が計画的に数回、校内研修を行ったことで、教職員一丸となって人権問題について学び、人権についてじっくりと考え話し合う時間を持つことができた。 ◇ミライシードなどの活用事例について研修し、日々の実践に繋げることができた。	B
	校内研修の状況							
家庭・地域・校種間連携	家庭・地域等の状況		○学校に対して、たいへん協力的である。地域全体で児童を見守る活動も組織的に行われている。	○児童たちのスムーズな進学に向けた小・中連携を進める。	○計画に基づいて小中連絡会等を定期的に開催する。	○6年生が進学に向けて見通しが持てるよう、中学校区で集まり、挨拶運動（児童会によるニコニコデー）について交流したり、相互に授業参観したりする機会を設け、児童の現状や課題について情報交換し、共通理解する取組を継続する。また、入学説明会や体験授業を行う中で、児童の様子を細やかに見取るようにする。	◇児童生徒交流会で中学校区の児童会の取組について交流したことで、子どもたちは他校の様子や取組を知り、良い刺激を得ることができた。 ◇中学校区の教職員が集まって相互に授業参観し、児童の現状や課題について情報交換したことで子どもたちの課題を共通認識することができた。また、中学校区で足並みそろえた指導について考えることもできた。 ◆6年生が進学に向けて少しでも見通しが持てるよう、中学校の体験授業等の取組について検討し、コロナ禍で途絶えていた校種間の交流を深めていきたい。	B
	小・中における教科連携等の状況		○中学校区で集まり、児童の現状や課題について情報交換し、共通理解する取組について、単年度の連携活動に終わらず、継続的・計画的に行っていく必要がある。 ○入学説明会や体験授業を行うことが児童のスムーズな進学につながっているので、今後も継続した取り組みとして計画していきたい。					